Nothing compares to the changing beauty of nature

折節の移り変るこそ ものごとにあはれなれ

～徒然草～

山紫水明の国 日本… 太古の昔から私たちは、四季の移ろいを美しいと思う感性を身につけてきた。

柳緑花紅 ― 桜の歌聖 西行 ―

ふるさとの風 ～卯月～

春、

桜花爛漫。日本人は桜を心底愛する。

華麗で満開な桜に酔いしれ、また散りゆく姿に哀惜の情を感じる。

花と月を愛し旅に命をあずけた歌人が、己の魂を三十一文字（みそひともじ）の美学に託した。

西行法師、法名は円位、名は西行。俗名は佐藤義清（のりきよ）。

西行が生まれたのは元永元年（1118）、武士の成長が目覚ましい時代である。奇しくも同じ年に平清盛が生まれており、二人は武と聖、政治と文化において後世に大きな影響をあたえた。

鳥羽上皇に北面の武士として仕えた西行は、二十三歳の若さで遁世という道を選ぶ。

そして仏道修行のもと諸国を旅し、和歌に自分の魂の遍歴を重ねていった。

諸国を行脚し続けた西行が、晩年高野山から平穏な伊勢の地に移り住むようになったのは、源平の戦禍の世を嘆いての事である。

治承四年（1180）、平清盛福原遷都を伊勢で耳にして次の歌を詠んでいる。

「福原へ都遷りと聞きし頃、伊勢にて月の歌詠み侍りしに

～雲の上や 古き都になりにけり すむらむ月の影は変らで～」

―西行上人集 四三五―

西行の草庵は神宮のほとりのあちこちに結ばれた。

歌枕の地二見浦の安養山に結ばれた草庵は、海上はるかに伊勢湾の島々を望む風光絶佳の場所であった。無造作で簡素な暮らしぶりは伊勢の数奇者達の共感を呼び、彼は次の句を行住坐臥（ぎょうじゅうざが）の口ずさみとしていたという。

～一生幾ばくならず 来世近きにあり～

後に芭蕉がこの草庵を訪れた時、西行を偲んで詠んだ歌がある。

～硯かと 拾ふやくぼき 石の露～

西行の死から五百年、外宮遷宮を拝んだ時の事である。

伊勢での七年間の庵居は、神官たちとの交流もあり、和歌の心を彼らに教え連歌にも興じた。

また自らも神宮を詠み、後に歌集「御裳濯河歌合」を内宮に、「宮河歌合」を外宮に奉納しており、神域の美しさを読んだ歌が数多くみられる。

～岩戸あけし 天つみことの そのかみに 桜を誰か 植えはじめけむ～

―御裳濯河歌合 一番左―

～神路山 月さやかなる ちかひありて 天の下をば 照らすなりけり～

―御裳濯河歌合 二番左―

西行にとって伊勢神宮の存在は確たるものとなっていった。

文治二年（1186）、西行は東大寺再興の歓進のため、伊勢の地をあとにし奥州平泉へ旅立つ。

その後、京都嵯峨に草庵を結び、建久元年（1190）二月二十六日河内国の弘川寺の草庵において入滅した。自然美へのあくなき探求心、現実への深い洞察力を持ち続けた七十三年の生涯であった。

願わくは 花の下にて 春死なん その如月の 望月の頃

―山家集 七七―

自身がかつて詠んだ歌のとおり最愛の桜の盛り、満月の元、釈迦入涅槃の日の事である。

僧形であった西行が、神前に近づけなかった故に神宮を伏し拝み詠んだ歌がある。

何事の おはしますをば 知らねども かたじけなさに 涙こぼるる

神宿る聖地が人間の魂によびかける言霊は、時空を超えていつの時代も同じである。

三重の西行法師遺跡考 伊勢の風土と文学５ （中川竫梵／著 L911／ナ）

図書館だより
2012年４月号より